

Save The Tropical Forests

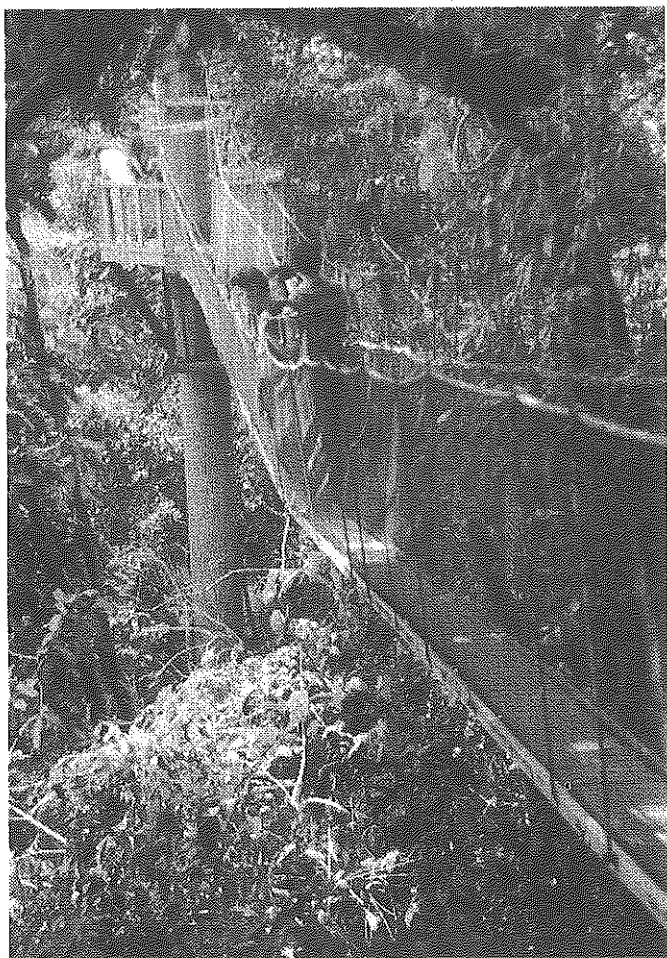


森の通信

2006.10.3

CONTENTS

- オム回アジア森林パートナーシップ会議にて…… 3p
- やれば出来る! ラン違法伐採停止キャンペーン②
…… 4p
- カリマンタン巨大オイルパームプランテーションに7007 …… 7p
- カリマンタンの森林の危機
…… 9p
- 組織化する違法伐採
新聞記事より…… 10p
- 世界の森林ニュース…… 15p
- 西カリマンタン、国境への旅
(前編) 甲村彩乃
…… 16p



▲ 40m上空から熱帯林を見る(サバ州・ネーリン)



▲ ロングハウスで孫をあやむ祖母(マラウ州)

《ウータン・活動報告》

- 2006 6・10 廃棄物学会で「違法材問題と企業の停止」講演*西岡
- 6・13 新規発見の企業分など「ラミン材停止依頼文」検討
- 6・25 新規発見のラミン使用企業 30 社へ「ラミン材停止依頼文」発送
- 6・27 「ウータン」発送
- 7・11 新規ラミン使用企業 20 社へ「ラミン材停止依頼文」発送
- 7・13 新規ラミン使用企業 65 社へ「ラミン材停止依頼文」発送
- 7・17 ラミン使用企業へ「ラミン材停止回答」締切
- 7・20 新ラミン 30 企業社へ「ラミン材停止依頼文」発送、計 725 社
- 7・29 ウータン、ラミン調査会、合同会議
- 8・3ー Nさん、インドネシアへ。ラミン調査会、港湾企業調査、西岡は
激減のウリン材調査へ
- 8・5 ラミン未回答企業 37 社へ発想。
- 8・15 ラミン停止企業、使用企業より回答で、停止は 365 社となる
- 8・18ー マレーシア・サバ州日系企業のラミン材停止につぎメルバウ材停止依
頼も代表者不在、不発
- 9・3 ウータン、ラミン調査会、合同会議
- 9・6ー 西岡、ジョクジャカルタでの「アジア森林パートナーシップ」会議後、
インドネシア・カリマンタンの違法伐採調査

とこびつ ～ 常夏のインドネシアに雪が降る～

第6回、アジア森林パートナーシップが9月6日から開かれた。
ランウータンが危機になっているタンジュン・ポティン国立公園の調査
を兼ねて。会議に同行は、馬じみのインドネシアNGO「テラパック」
のヤヤット氏。現地で地球の友 Japan の岡崎さんや日本政府
の人達とも今後を話すことになる。

6日、ヤヤットと私は少し遅れて参加。初めにインドネシア林業大臣
代行サウの「あいさつ」とあった。会議の報告は、FAO、世界銀行、調査団
体のCIFORなど。原生林破壊して紙生産を続けていたAPRIL社も報告。

同社は「今後、アジアの植林を中心に全て植林材サウの製造とし、全うな
森林管理をする。」と……。インドネシアが大きく変わり出した。

久しぶりに会うNGO「インドネシア・フォレスト・ウォッチ」の事務局長トグ・マヌレン
氏と拍手！。

トグ氏は「ウータン、グレート！ Good！」と言ってきた。彼もラミン停止のこと
を良く知っているから。名刺交換ある。「Advisor of Ministry of
Forestry」と。驚いた。トグが何と林業大臣のアドバイザーになって
いたのだ。林業大臣のカビンのカビン持ちではなく、知恵袋となった
のだ。林業大臣の代行あいさつはトグ氏だった。

「いつ、こんな仕事に変わったか」と聞けば、「その6月だ。」とトグ氏はニヤニヤ。
テラパックのヤヤット氏は「カビン林業大臣は大きなミスだ。」と言う。
皆、じっとこけそうになる。それでインドネシアサぞんぞん変わったのだ。
危険なアドバイザー。違法伐採に全面対決し、モラトリウム（一時停止）を
要求してきた彼だ。

カリマンタンメガプロジェクトも中止になるかもしれない。

違法貿易も停止方向へ向かい、森林保全は固いなく進む。
キリマンジャロでなく、インドネシアに雪が降るのだ。

全ての破壊計画が中止となるかもしれない……。



《やれば出来る！ラミン材・違法材停止⑨》国際キャンペーン4)

事務局長・西岡良夫

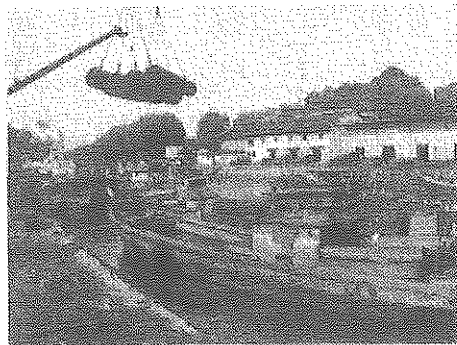
【インドネシア・スマトラ島から半島マレーシアへの密輸】

2001年8月6日にラミンのワシントン条約への登録が発効した後も、英米 NGO の E I A とインドネシア NGO の Telapak はマレー半島西岸の調査を行った。Telapak は説明してくれた。

「Batu Pahat(バトゥ・パハ)港では、インドネシアの国旗を掲げた小さな船からインドネシア税関の印がない丸太の荷降ろしが行われているのが見られた。E.S.Ng Holdings という会社。木材置き場で見られたインドネシア船の乗組員は、木材はカリマンタンからのラミンであることを認めた。カリマンタンの密輸王アブドラ・ラシッドが経営の Pt.Tanjung Lingga 社からだった。」

半島マレーシア中部のマラッカでは、幾くつもの小さな船がラミンを含む丸太の荷降ろしをしているのが見られた。船の乗組員は、「大半の木材はマラッカ海峡をはさんだインドネシアのリアウ州からである」と。

2001年11月、違法伐採と違法な木材貿易の解決のため、インドネシアの丸太輸出禁止が発効した。同年11月1日、インドネシア林業相との会合で、マレーシアのリム第一次産業相は、【輸出禁止】を支持し、インドネシアからの丸太を受け入れないことを約束した。だがその後の Telapak らの 2002 年 5 月の調査で、「マラッカ州とネグリ・



(写真)スマトラからマラッカへ運ばれた違法材／写真提供 Telapak)

センビラン州の州境にあるクアラ・リングで、大きな新しい木材積み下し施設が出来てきた」と指摘。

また首都クアラ・ルンプールにも近い「ポート・クアラとクアラ・リングで月間 1 万 5000m³ 以上の木材を取り扱っていた」と Telapak と EIA が発表した。

これは、その頃からウータンが Telapak とクアラ・リング情報を流し合い、2002 年 3 月にウータンで聞き込んだラミン材の違法貿易調査と同一だった。

E I A と Telapak が調査結果を公表したことで、マレーシア第一次産業相は 2002 年 6 月 25 日、改めて「インドネシアからの丸太の即時輸入禁止措置」を発表した。これは、マレーシアの木材産業への悪印象を払拭する狙いもあったと言われている。

ところが4ヵ月後の2002年10月初め、ウータンが再度調査した際に、クアラ・リンギでは大々的に違法取引の操業がされていたのだった。これはTelapakからの情報だった。

数多くの小さな木製の船が丸太や角材の荷降ろしをしているのが見られた。現場の人は「全ての木材がインドネシアから。偽の輸入証明もある船もある」と証言してくれた。

Telapakは、「クアラ・リンギ港は静かになっていたが、Muar(ムアル)港でスマトラからの違法材を満載したインドネシアの木製の船が32隻見られた。船の多くはインドネシアの国旗を掲げており、全ての船の乗組員はインドネシア人だ。現場の人の話によれば、木材は全てインドネシアからのもの。10隻に1隻ほどがラミンを積んでいる。

またBatu Pahat(バトゥ・パハ)では、インドネシアの国旗を掲げた[輸出許可書なし]の船から丸太が荷降ろされているのが見られ、工場へ追跡してみた」と報告してくれた。

—【(Report)2006年ポート・クラン(Port Klang-Malaysia)の密輸】—

私は、2006年2月、ポート・クランで未だにインドネシアからの丸太や製材品が輸入されているのかを確認のために訪れる。

「今日はインドネシアからの船は来いていないよ。だいたい一日に数隻見られるんだが…」とポート・クラン北側の港で、運転手が話してくれた。

「他で見られるのか」と運転手に聞くと、

(写真/2006年2月14日午前10時、ポートクランにインドネシアから運ばれた違法取引の丸太。事務所の小屋には、税関や木材企業のJETI AWAL IDAMAN SDN(会社)の職員でなく企業に雇われた警察がいた。/by 西岡)



「ポート・クラン西港にインドネシア船が来ているだろう」と話してくれたので、タクシーを進めてもらう。

木材会社事務所の真裏の倉庫と空き地に、インドネシアからの丸太と製材品が積み上げられていた。タクシー運転手は、木材会社の事務所の男に許可を得た。なぜかそこに警官がいた。

「OKだ」と身分証明書カード記載を認めた警察。もう1名は何やらどこかへ電話をしている。その間に、私は違法に運ばれた丸太、製材の写真を撮影する。

「OKでない、駄目だ」と警察は先ほど言った逆を言う。

「何でだ」とタクシー運転手が怒る。

私は入れないから帰ろうとすると、突然チンピラ2人が来た。

「写真撮っただろう。フィルムを切れ」とすぐむ木材会社の手下。

「観光に来ただけだ」とこちらは言う。



(写真撮影/西岡・2006年2月14日、事務所脇から撮影。違法輸入のインドネシア丸太置場で男は木材会社に通報。直ぐに木材会社のチンピラが来て、「フィルムを出せ」とすごんだ)

はっきりと違法材の現場をカメラで撮ったのだが、違う場所を撮影したデジカメの写真を彼らに見せた。

チンピラは「どうなったんだろう」と首を振り、諦めて彼らは帰る。その彼らを、タクシーで追跡。やはり彼らは木材会社の宿舎へ行ったのだった。

「まだ違法に運んでいるところがないのか」と運転手に尋ねる。

車は、続いてポート・クアラ南港へ行く。

「あいつら、無税でインドネシア材をマレーシアへ運んでいるのだ。それがバレたら困るからだ。つまり、木材企業の親分がアングラマネー(闇金)を増やすために、警察も買収しているんだ。ここまでひどいとは思わなかった」と車の中で運転手が言う。

クアラ南港ではインドネシア小船からゴムの加工材や製材品を下ろしていた。ラベルは全てインドネシアと記載されていた。

このように、大半が密輸がらみである。

それも悪徳な木材企業が警察を買収して、密輸を堂々とまかり通れるようにしているのだ。逮捕するものを見逃しているのだ。

これを止めさせるのは、政府であり、正しい警察であり、市民であろう。しかし木材企業は悪質警察とグルになって、2006年6月も密輸を堂々と行っている。

—違法伐採、密輸でさらにラミンは減少

密輸の取引の中心となるのがラミンだ。ラミンの主な沼沢林はマレーシア、インドネシア、ブルネイで、フィリピンでは消滅。

ラミンは、インドネシアで1983年に生産地が1333万haもあったといわれている。またマレーシア・サラワク州でも124万ha、半島部が46万ha等で200万haと推計(ワシントン条約, 1994年会合資料)される。

1980年代後半インドネシア、マレーシアの合計生産量は推定で最大170万 m^3 、91年には150万 m^3 、94年でも95万 m^3 近くの生産があった。だが、さらなる違法伐採や過伐、農園開発等で、2000年には両国からの公式輸出量が合計26万 m^3 に激減している。

インドネシアでの生産量は1980年代に86.5万 m^3 以上で、1991-92年に90万 m^3 、2000年には13万 m^3 に激減している。

また、マレーシアでのラミン生産量は、1989年には約60万 m^3 もあった。だが、過伐で93-95年に29-35万 m^3 、2000年に13万 m^3 強と減少している。

最近では地域貿易が公式輸出量より異常に突出し、違法伐採・過伐と密輸が横行している。正にラミンなど沼沢林の種の危機である。国際的な違法取引の停止が必要だ。

カリマンタン国境巨大オイルパームプランテーションについて

インドネシアにとっては外貨獲得に有望なパーム油産業。2004年時点で、総面積 530 万 ha にわたって栽培され、粗パーム油 1,140 万トンを生産し、輸出額 44 億 3,000 万米ドル、政府収入 4,230 万米ドルと、その経済効果は大きい。

今年 1 月インドネシア農業相は、世界および国内のバイオ燃料需要に応えるべく今後 5 年以内にインドネシア国内に新たに 300 万 ha のオイルパームプランテーションを開発すると発表した。このうちの半分以上の 180 万 ha は、カリマンタン島（ボルネオ島）のマレーシアとの国境沿いを開発する計画だ。

インドネシアは、10 年以内にマレーシアを抜いて世界一のパーム油生産国になることを目指している。この開発事業には、資金調達について国内のグループ企業や中国開発銀行などの間で覚書が結ばれている。

カリマンタン島は東南アジアで唯一残る広大な森林地域を有する。オランウータン、アジアゾウ、スマトラサイなどが生息し、1994～2004 年の 10 年間に新たに固有種が 361 も発見されている。当初計画では、三つの国立公園内の原生林を破壊し、オイルパームに不向きな山地を切り開き、多くの先住民の慣習的な権利を侵すものになる。

2005 年 7 月にこの計画が発表されて以来、多くの市民による反対運動やロビー活動、国内メディアおよび外国からの圧力により、政府は計画の変更を余儀なくされた。①ユドヨノ大統領は、国境開発事業自体は全般的に支持する一方で環境面の課題の存在を認め②森林相は、オイルパームの植栽のために保護森林を引き渡さないことを宣言し③農業相は、国境地域の 90% 以上がオイルパームプランテーションに不向きであると認めた。2006 年 4 月の状況としては、ブディオノ経済担当調整相が、当初の開発計画の是非を検討しているところだという。

しかし、これら大臣の発言はオイルパームプランテーションの開発中止を保証するものではない。国境地域にはパーム油会社がすでに進出している。国家開発計画庁は「国境地域」の定義を 5～10km から 100km に変更し、国境線の「際」の開発を禁止する一方で、300 万 ha がオイルパームプランテーション開発に適切であると評価した。さらに、拡張後の地域は先住民が住む森林地帯であるにもかかわらず、社会的要素は勘案されていない。政府の開発計画を知らされている先住民は少なく、また知らされている場合は強い反対を示している。開発に伴う道路建設そのものによって山が切り開かれるほか、これまで人の手が入っていない地域で不法伐採、不法採鉱、森林転換の新たな波が起こる可能性もある。

インドネシア国内には、国際的な環境・社会基準への合致が第三者によって検証されている。パーム油は現時点では生産されておらず、持続可能な原料調達の面でも課題を残している。

(翻訳・まとめ:地球・人間環境フォーラム)

"The Kalimantan Border Oil Palm Mega-project", AIDEnvironment, April 2006

Commissioned by Milieudefensie – Friends of the Earth Netherlands and the Swedish Society for Nature

Conservation (SSNC) http://www.foe.co.uk/resource/reports/palm_oil_mega_project.pdf

カリマンタンの森林が危機—WWF ジャパン 7月「インドネシア認証林企業報告会」から

◎ WWF インドネシアによると、カリマンタンの森林変化は、1900年からはじめでは大半が森林であった。1950年頃はバンジャルマシン、サマリンド、ポンティアナック市周辺の一部が森林以外に変わった。ところが、戦後のフィリピン、マレーシアと商業伐採の大きな流れがカリマンタン島でも起きはじめた。

1985年頃にはカプアス川流域、バンジャルマシン、サマリンド、バリクパパン、海岸地区を含めたところの森林が大半消失した。ただ商業木にならない沼地の開発は残されている地域もあった。その後、ラミンなどが生える沼地の開発が行われ、違法伐採、アブラヤシ巨大農園開発で、2005年には森林が残るのは山岳地と国立公園、保護区のみ。

このままでは2020年頃に森林が消滅する危機だ。商業伐採が持続可能な形で行われていない。WWF インドネシアでは持続可能な森林経営を目指すよう今企業に働きかけている。政府も違法伐採対策を近年進め、持続可能な森林経営を目指す企業が増えた。APP社 (Sinar Mas Group) は持続可能林に転換としていたが、約束を反故にしている。

◎スマリンド社 (Pt. Sumalindo Lestari Jaya 社) の事例

スマリンド社ともう1社が今回来日して話した。

スマリンド社は、東カリマンタンで合板、MDF生産を生産。第2林区がサラワク国境から80km離れた国境に近いLong Bagunに267600haあり、この森林でFSCの認証林の形成を始める。47年間の賃借で、天然林の更新をするという。他の3箇所もFSCの認証を受けた林。原生の天然林80%、214,817ha、伐採跡地の植林18%・47,512ha、非森林地区3%。インドネシアでは1位のFSC認証林区だ。

スマリンド社の方針は、

A) 1992-2002年に、*持続可能林の管理を学び、理解する、*実際の森林管理の状況確認、分析をする。また*社会開発と人的資源トレーニング、*環境配慮型伐採、*外部コンサルタントと相互理解を得る形でFSC認証を取得をめざした。

B) 2003-2005年は、森林の監査と各現場の検証、*持続可能な森林経営(SFM)と認証を実施した。*地域で公開ミーティングも実施

C) 2006年以降は、*未解決の部分の検証の遂行、現在の方向の検討だという。同社は「森林認証を得るに原木供給は長期的に低下するが、その後安定供給できる。いま認証材、とりわけ環境配慮の木材を求められている。認証は豊かな森を取り戻すことに繋がり、違法伐採防止となる。14年かかりFSC認証したが、監査を保証できるし、先への先行投資となる。要はトレーニング、従業員への意識改革、森林の品質管理だ。The Nature Conservationと協力し、原木の位置、伐採地、集材の確認を実施。バーコードを1本1本に貼り付けるCOC(Chain of Custody)システムをおこない、森林内の木材をすべて管理できる体制だ。

現在、経済的に苦しいが、将来はFSC認証材で保障される。私たちが先行して、持続可能な森林経営をすれば、森林消滅しなくてすむだろう。」と。

林野庁の森田室長とも話して、スハルト政権に干された企業が持続可能な森林経営を今後も目指し、このような企業が増えれば、今後のインドネシアへの望みが繋がる。環境配慮し、よい企業が殖えたら、あと10年で森林は消滅しないのだが、...

(西岡)

「森を盗む」人々と地球

第3部



違法伐採の現場

赤道直下の熱帯雨林。男たちが振り下ろした手斧が、食い込み、樹元がきしんだ。1分足らずで、高さ20以上の木は若木をなぞ倒し、地響きをたてて倒れた。
インドネシア領カリマンタン（ボルネオ島）で、西カリマンタン州自然保護局の特別森林警備隊に同行し、無許可伐採が繰り返される。丸木やシンの獲できた粗末な作業小屋に8人の男と炊事係の女が1人いた。建築材、家具材として使われるアリのボクは、直径100本近く切り倒す。直径40、50センチの中継木が中心のため、経費がかさむチェーンソーではなく、手斧が使われている。
一村には水田とゴムの木があるが、それでは生きていけない。危険な仕事だけに、妻と10歳の息子のため、



組織化する違法伐採

もつ5年も続いている。州内のアヘ族の村から出稼ぎにきたリーダー格の男が言った。
大木が倒され、狭い日差しが差し込む森の中はうだるまじい。温った風に乗り、別のグループの斧の音が遠くから聞こえた。

「現地責任者」を名乗る。男(55)によると、丸木はトロッコで川岸に運ばれ、船で州都ボクシティアナクの木材市場へ運ばれる。男は薄



違法伐採現場で、男は手斧で切り倒した木の上を登り、歩いているように歩いた（ボルネオ島西側）＝宮坂永史撮影

「笑い浮かべ、「伐採許可証はここにはない。私は頼まれて材木を運んでいるだけ」と話した。
捜査を指揮する西カリマンタン州自然保護局のアートウィン・エフエンディ事務局長は、違法伐採に手を染める貧しい村人たちの背後

の約8割は輸入材、その4分の1は熱帯材だ。インドネシアからは年間約260万立方メートル、04年が輸入され、今も日本の熱帯材総輸入量の4割近くに達する。5割を占めるマレーシアと並ぶ有力な供給源だ。英、インドネシア両政府

違法伐採は、近親者や取り巻きの伐採権を乱発したスハルト政権が98年に崩壊した後も、深刻化する。経済の混乱で困窮した農民が加わり、犯罪組織が入り込んで、違法伐採は横行した形で広がる。
マレーシアと国境を接すところだ。

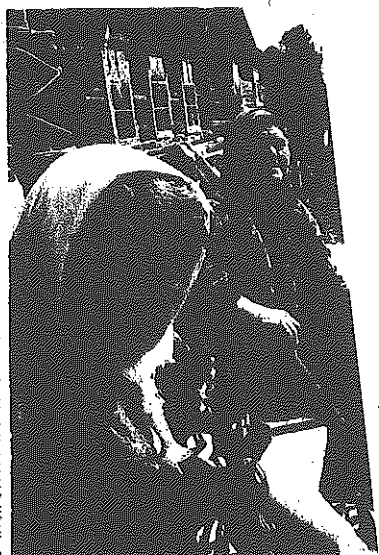
「現地責任者」3人を逮捕、ブルドーザー7台、日本製の四輪駆動車6台、丸木約2900本を押収した。機材に入ったオランウータン3匹も保護された。
「マレーシアに本社がある企業の関与がわかっていくのが」。国立公園のアクセス・ステイト所長は、違法伐採グループが造成した国境まで続く赤茶けた伐採道路を見つめ、悔しげに

果てしなく続くカマツ ったため、春になると霧が
 なく針葉樹林のまをへリコ 一度に解け、水位が急上昇
 プターで飛び、ロシア・ して水があふれる」。ピョ
 東シベリアのトクマ村に ートル・ツェベツォフ村長
 向かった。村のあるイル (28)は訴える。
 クーツク州カタン方に 其の爪痕が痛々しい傾
 入ると、七ころころ、緑 ぐ小屋、高さ14層まで、霧
 の絨毯が剥がれたような跡 が絡むフェンス、崩れた土
 がある。
 蛇行するネバ川の岸辺に 川のはずれ
 木造家屋約30軒が並ぶ村に に住むオリガ
 は、少数民族エベンキ人の ・シベツォ
 大人86人、子供24人が住む。 フさん(73)
 村人の悩みは、毎春やって は、5年前の
 くる洪水だ。



「洪水は2001年から 5月、生まれて初めて洪水
 突然、始まった。川の上流 を体験した。
 で伐採が行われ木がなくな 午前4時、隣に住む娘

洪水襲来、嘆きの春



が、下アをドンドンたたき、 たと嘆く。
 「ママ、寝てる場合じゃな いわ、洪水がくるのよ」と
 叫んだ。あふれ出した水が 氷の張った川面を押し上
 げ、そこらじゅう、水、水、 水、小麦や砂糖、鶏、豚、
 子牛も沈没してしまった」
 狩りの達人、ドミトリー

も来ず、その後州に問い
 る」と回答があったが、た
 「州当局が現場に行き調べ
 の森林伐採中止を訴えた。
 を書き、先住民の同意なし
 の森林伐採中止を訴えた。
 トラックや重機が森林地帯
 に入れる冬は伐採シーズ
 ん。今年は、村から5km離

ンカ区での違法伐採は、人
 張を否定する。
 この大手2社によるカ
 地球温暖化の影響かも。ト
 クマ村には食糧やトラック
 提供など支援をしている
 し、近郊での伐採はすべて
 営林署の許可を得て適正に
 行っている」と、村人の主
 張を否定する。
 天然資源省のミハイル・
 ギリヤエフ、森林局長代理
 は、「現行法制度では、地

日本との商社の関連会社で
 あるイギルマ
 総合林業のウ
 ラジーミル・
 アンテポフ社
 長は「洪水は
 罰金総額は4億5千万円、
 3億円」という結果が出た。
 しかし、罰金徴収を取り
 締まりは、暗黙に受け上げ
 ている。

シベツォフさん 合わせてもなしのつぶて
 (55)は「ロシアやクロ
 ンが少なくなっ
 村の四方には、大手伐採
 日本の商社の関連会社で
 あるイギルマ
 総合林業のウ
 ラジーミル・
 アンテポフ社
 長は「洪水は
 罰金総額は4億5千万円、
 3億円」という結果が出た。
 しかし、罰金徴収を取り
 締まりは、暗黙に受け上げ
 ている。

れた所で新たな伐採が行わ
 れた。
 初回調査は全ロシアで日
 本の面積の1・4倍に当た
 る約300万ヘクタールと
 し、許可区域から大きくは
 み出すなど違法伐採された
 木材は計1億3千万立方
 メートル、約1億4千万立方
 メートルという結果が出た。
 昨年、始めたものだ。
 法伐採を懸念する国際的な
 声に押され、ロシア政府が
 地方の行政当局に対し、地
 上確認調査を急ぐよう通達
 を出した。

工衛星と航空機を使った違
 法伐採衛星モニタリング調
 査により、判明した。世界
 森林の4分の1を占める
 ロシアの森林は、熱帯雨林
 が減少した90年代から世界
 の木材供給地となった。衛
 星モニタリング調査は、違
 法伐採を懸念する国際的な
 声に押され、ロシア政府が
 地方の行政当局に対し、地
 上確認調査を急ぐよう通達
 を出した。

地方の動きは、ト
 クマ村近郊で確認調査が行
 われ、違法伐採の有無が確
 定するのは「まだ先」(イ
 ルクーツク州)という。

天然資源省のミハイル・
 ギリヤエフ、森林局長代理
 は、「現行法制度では、地
 上確認調査は、地

法伐採と確定でき
 ない。空からの調
 査により、判明した。世界
 森林の4分の1を占める
 ロシアの森林は、熱帯雨林
 が減少した90年代から世界
 の木材供給地となった。衛
 星モニタリング調査は、違
 法伐採を懸念する国際的な
 声に押され、ロシア政府が
 地方の行政当局に対し、地
 上確認調査を急ぐよう通達
 を出した。



ロシア・沿海地方の町、ダルネリーチェンスクで、製材工場の敷地のはずれに、広葉樹ナラ、タモの丸太が積み上げられていた。

別捜査第4部隊副隊長(31)が言う。

「ここから1〜2キロ離れた村の倉庫で発見した。伐採地や購入先を示す文書はいっさいなし。持ち主の中国人の男2人はビザの延長手続きのために帰国中で、そのまま戻って来なかった。鉄道で中国に持っている。天然資源省森林

第3部



同じように、2005年にロシアは4000万立方尺の丸太を輸出した。今年3月の輸出量は昨年比10%増えたという。その行き先は圧倒的に中国が多い。中国の貿易統計資料によると、中国のロシアからの丸太輸入量は2

005年に2004万立方尺で、1006年の52万立方尺に比べ約38倍にも急増。加工して国内で消費するほか、日本、米国、欧州に製材材などとして輸出している。

昨年12月、ヌルガリエフ内相は「林業と木材産業における犯罪一掃」を掲げ、公務員法違反や汚職、密輸の摘発を全国の捜査機関に指示した。これを受け、沿海地方で24の公務員法違反が立件された。

と、罪名は刑法260条の許可なしの伐採。病虫害の蔓延を防ぐ衛生伐など森林を健全に保つための伐採としてナラとタモ800立方尺分の伐採を業者に許可した際、環境評価を実施しなかった点が問われた。

専門家は指摘する。官林署長が許可した衛生伐の現場を見に行った。濃い緑、目がさめるような黄緑、抹茶色、赤茶、薄目にはモザイク模様に見えるシホテアリン山脈のまんなか、標高1500以上の山中。連邦政府がチヨウセンゴウウマツの実を保護するため指定した第一級保護区(12万ヘクタール)内には、数か所の伐採・集材跡があった。

汚職、不正 摘発これから

その一つ、ダルネリーチェンスクから90キロ離れたロッシナでは、官林署長が刑事訴追され、近く裁判が始まる。ケンナシ・シェーレピン環境検査官によ

り、罪名は刑法260条の許可なしの伐採。病虫害の蔓延を防ぐ衛生伐など森林を健全に保つための伐採としてナラとタモ800立方尺分の伐採を業者に許可した際、環境評価を実施しなかった点が問われた。

と、「私がこれまでに出した5000件の伐採許可のうち、私が開いている。幹には穴が開いている。病気の木を取り除くための伐採であったはずだが、病の木は打たれ、健康な木が運ばれていた。

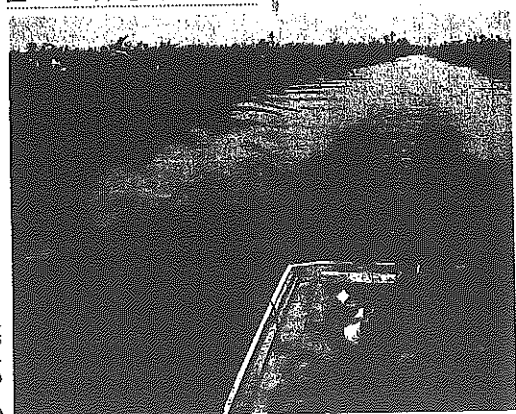
官公庁の不正や密輸出など違法木材ビジネスの闇は広がる。摘発は続に就いたばかりだ。

(英文はあすのデイリー・モスクワに掲載します)

第3部



地に生き物の気配はない。「見た目は同じ森でも、単一樹種の植林地は多様な生き物が暮らす森とはまるで違う。サルや鳥は一度と戻らない」。同行した世界自然保護基金(WWF)のスタッフがつぶやいた。シンガポールに本社を置



皆伐で丸裸の伐採跡地。泥炭湿地からしみ出した濁り水を切って、村人を乗せたボートが行く。スマトラ島中部のリウ州で、川沿い水田風景

本に住むわれわれの課題は大きい。(おわり)

直径60〜80センチの丸太が延々と、ひからびた熟材材が、自らのように折り重なる。伐採地を荒涼とした風景は、嵐後の原野のようだ。インドネシアのスマトラ島中部のリウ州、州都パカンバルの南東150キロにある大手製紙会社「エープリル社」の伐採地で「チェンソー」がなり、天然林が次々と切り倒されている。トラックが行き交い、直



エープリル社の植林地
○エープリル社の製紙工場
●テソンニ国立公園

伐採▽植林動物戻らず

天然林の中で、作業員に姿を委ねる。鯉魚のほとんどもは輸出用。昨年、日本には計10万7000トンが輸出された。紙の大半はインターネットの普及で需要が伸びるプリンター用紙で、日本国内の産店などで売られている。7年で樹高が25倍になる。州内の巨大な製紙工場、増州全域に拡大した植林

エープリル社は、スハルに保護するべき森は切らずに「残してある」と語る。リウ州では、野生ゾウと村人との衝突が絶えな

人がゾウに襲われ、死傷したケースもある。エープリル社を含む複数

の企業が植林地と、村人が森林を伐採して植えたアラヤシ細が、広さ4万平方メートルの国立公園を取り囲む。天然

林の木の葉や果物に依存してきたゾウは、アカシアが大の苦手だ。生息域を狭められ、エサ不足になったゾウは、アラヤシの若葉を食べに人里下りしている。餌は作物被害を恐れた村人が仕掛けたとみられる。アラヤシから取れるパーム油は洗剤やマーガリン

の原料になるほか、今、環境にやさしい「バイオ燃料」として脚光を浴びる。インドネシアの栽培面積は90年の110万ヘクタールで3倍増。日本の環境省は5月、アジア産バイオ燃料の生産拡大を後押しする方針を表明したが、産地での森林破壊には言及していない。先進国の需要に応じ、世界規模で進む森林の減少と違法の枠を超えて進む。世界第3位の木材消費国、日

▼タイガの皆伐（かいばつ）の行われた跡
ロシアでは伐採後のタイガは大概この写真のような状態で放置されます。
この後ここで何が起るのでしょうか？伐り出された丸太はどこへゆくのでしょうか？



東京都の5倍、100万ヘクタールのシベリア森林 露、中国へ貸与合意

◀“侵略”警戒も▶

【モスクワ＝内藤泰朗】ロシア天然資源省はこのほど、中国政府に対して東京都の面積の5倍近くに相当するシベリアの森林100万ヘクタール(1万平方キロ)の貸与を正式に検討していることを明らかにした。世界最大の領土を有するロシアだが、中露両国間でこれだけ広大な土地の貸与は初めてのことで、内外から注目を集めている。

ロシアでの報道によると、中露両国は、森林問題をめぐる次官級協議で貸与について基本合意に達した。油田地帯の西シベリア・チュメニ州の森林が貸与の候補に挙がっており、期間は25年以上の見通し。森林伐採や加工、紙生産などを計画している。

ロシア天然資源省の広報官は「森林資源共同開発のための試験的プロジェクトだ」と説明し、中国資本が参加する合併企業への貸与形態や貸与価格など各種条件をつめていると述べた。

ロシアの有力日刊紙、独立新聞は、シベリア中部のイルクーツク州なども中国との土地共同利用を検討しており、今回の森林の貸与がさらにほかの天然資源分野に拡大する可能性があるとして、「中国のロシアに対する侵略的な拡張につながる危険がある」との懸念を示した。

中国側は、経済発展のために大量の天然資源を必要としており、世界有数の資源大国であるロシアとの資源面での協力を今後、一層拡大したい考えだ。

ただ、人口減少が著しいシベリアや極東地域では、近年の中露関係好転を受け、中国の建設会社や小売業などの進出が加速。中国人の流入が膨らんでおり、公式統計では45万とされるロシア在住中国人の数は、非合法入国も含めると100万以上ともいわれる。「中国との関係には毒があり慎重に進めるべきだ」と警告する専門家もあり、中国の発展と伸長は、ロシア国内でも強い警戒感と波紋を呼んでいる。

【2006/07/30 東京朝刊から】

【ウータンらで、G購入適合のラミン材停止へ】

6月ウータン、ラミン調査会の活動で、『G購入ラミン材』の机を販売するG研に停止申入れし、停止さす。調べるとグリーン購入法に正規手続き無でG購入適合品とネットPR。ラミン材停止は合計365社、No1ホームセンター・カインズ等。

【米国自然保護G、違法マホガニー輸入提訴】

6月6日、ペルー先住民団体と米国自然保護団体 Natural Resources Defence Council は、ペルーのアマゾンで違法伐採されたマホガニーの輸入を許可した米国政府を相手取り訴訟。ペルーマホガニー材は全て違法伐採され、高級家具に使用される。米国生物種保存法とワシントン条約(CITES)違反のため。(ens ニュースより)

【英米NGO、マレーシア自由貿易を批判】

英米NGOのEIAは6月16日、「インドネシアから切り出された木材がマレーシアに多く輸入され、その木材が米国へ輸出されている。米・マレーシアの自由貿易協定が違法伐採を促進しており、改善すべき」と発言。(ロイター誌より)

【サラワク・先住民アナン人、道路封鎖続ける】

6月16日からマレーシア・サラワク州の中部バラムのバ・アバン(Ba Abang)のアナン人がインターヒル社の森林破壊に抗議し道路封鎖する。2002年より度々道路封鎖していたが、今回は多くのアナン人が集まり、伐採道路を封鎖。原生林や彼らの慣習林破壊で、2-3月にも道路封鎖していた。7月初め、警察等で道路封鎖した地点を解除したことで、村長は「暴力を振るわないよう警察に依頼してほしい。森を守るため闘う」と声明。8月、解除後違う場所で道路封鎖。(ブルーノ・マンサGと現地先住民NGOから)

【河合楽器、木材調達ガイドライン策定】

7月、JATAN(熱帯林行動ネットワーク)より、河合楽器製作所が「木材調達ガイドライン策定」し、音楽業界初と連絡あり。

【Gピースインター、マクドナルド社と森保全へ】

世界で最も生物多様性豊かなアマゾン。だがこの10年間でサッカー場5つの森が消失。原因は商業伐採、牧場・穀物生産の開発、ダム建設など。グリーンピースは、大豆生産で森林皆伐して、マクドナルド社などヨーロッパ等の鶏の飼料にされている調査を実施。マクドナルド社等へ停止を申し入れていた。この7月M社は、アマゾンの森林破壊し栽培の大豆を飼料にする鶏の肉のハンバーガーを販売しないと合意。大きな前進。他の企業もそうなって欲しいものだ。(グリーンピースジャパンより)

【インドネシアの森林、回復に120年必要】

インドネシアのカバン林業相は、この20年で過剰な伐採、土地開発、自然災害、山火事等で6千ha以上の原生林が破壊され、回復するのに120年要すると発言。政府の植林計画でも年60万haしか回復しないと。今以上の破壊なら更に期間を要すると。(8/7 Jakarta Post より)

【ロシア、中国にシベリア100万ha伐採貸与】

8月3日の日刊木材新聞によると、ロシア資源省は中国企業にシベリア100万haの林区を貸与し、伐採・輸出・製材とパルプ工場開発許可を与えた。今後シベリアでの森林開発が増加だ。

【5NGO、企業等の森林配慮の木材調達公表】

8月23日、JATAN、FOEJapan、グリーンピースジャパン、WWFジャパン、地球・人間環境フォーラムは、「森林生態系に配慮した木材製品の調達に関するアンケート」を発表。結果は、木材生産地へ配慮の文の調達方針を持たない企業等が164組織の回答の74%と。そのうちの47%が今後策定の予定。また木材供給地を把握の組織は17%しかいない。木材調達の合法性の確認については40%で、森林認証材製品の利用は30%しかないと。木材調達方針の有無は、38組織(23%)が「有り」と回答のうち20組織が自治体と。(JATAN、FOEジャパン等より)

西カリマンタン、国境への旅（前編）

神戸大学 発達科学部
中村彩乃

ジャカルタを離陸してから一時間余り、飛行機はようやく離陸体制に入った。だが、着陸予定のポンティアナックの街は一向に見えてこない。はっきりと見えないまま飛行機は着陸した。空港は相変わらず霧のような煙で覆われていた。これが、乾季恒例の焼畑の煙であった。空港から市街地へ行く間でも、あちらこちらで畑を焼く人々の姿を見ることができた。煙害の被害がひどくなっているということは、それだけ森林が失われているということではないだろうか、そんなことを考えていると、車は街の中心地に到着した。

今回、私が西カリマンタンへ来た目的は、オイルパームのプランテーションで働く人々の現状を知るためである。オイルパームといえば、最近洗剤の箱に「環境と資源を考え植物原料（パーム、ヤシ）を主洗浄成分に使用しています」というコピーが書かれ、エコロジカル、“地球に優しい”といったイメージを消費者に印象づけている。だが一方で、インドネシアでは現在、マレーシアとの国境で180万ヘクタールという大規模なプランテーションを計画しており、これに多くのNGOや地元の人々が反対しているという。現地では何が起きているのか、これを知りたくてやってきたのである。

ポンティアナックは、西カリマンタ

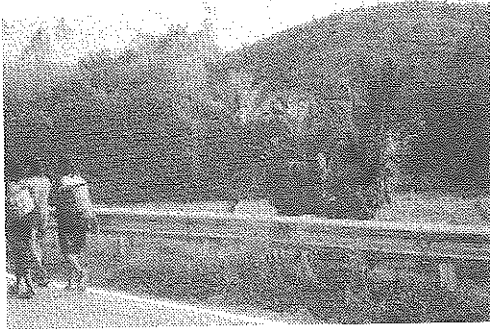


▲ 焼畑の煙につつまれたポンティアナックの街。

州の州都である。人口は約48万人（2004年）、主な産業はゴムや木材の加工業である。他のインドネシアの街と違い、街には中国系の住民が多く、モスクよりも仏教寺院が目につく。人々は私に中国語らしい言語で話しかけてくる。煙に覆われた街を歩いてみた。よく見ると灰が降っている。しばらくすると、目に痛みを感じ始めた。予想以上に煙害の状況は深刻である。カプアス川に向かった。カプアス川は、インドネシアで最も長い川であり、その長さは1143kmに及ぶ。川幅は広く、茶色の水を湛えたその川の流れは穏やかであった。だが現在、カプアス川の水位は低く、地元の新報のデータによれば水位は4.7メートルである。そのために、大型の船が航行できず、西カリマンタン州の多くの町で重油やガソリン不足という事態になっているという。ポンティアナックのガソリンスタンドでもガソリンを求める人の長蛇の列ができていた。

ジャカルタやバリと違って、日本人らしき人は全く見かけなかった。だが、

▼ 伐採で、すっかり不気味な山。



宿泊したホテルに長期滞在している日本人がいた。ポンティアナックにある Alas Kusuma Group の合板工場に買い付けにきている木材会社の人であった。違法伐採の話が聞きたかったので、思い切って声をかけた。彼の話によれば、Alas Kusuma Group の工場に運ばれる木材は、主に西カリマンタンと中央カリマンタンの国境地域の森林で伐採されたものであり、伐採された木材は川を通り、河口から海を通過してポンティアナックの工場まで運ばれるという。不法伐採なのかと問うと、林業省からも地元からも許可を取っているもので不法ではないと答えた。工場には、二つのラインがあり、一つのラインは日本の木材輸入会社が独占し、もう一本のラインは、その他の日本の商社や中小の木材会社によって使用されているという。この合板工場は、ポンティアナックの他にサマリダやクタパンなどに工場を持っているが、現在は操業を停止している。この理由として、森林伐採権を取ることが困難になったこと、奥地に行かないと伐採できる木がなく、経費の問題から操業を停止していること、違法伐採の問題でアメリ

カ政府からの圧力があるといったことを挙げていた。

国境付近へは、現地の NGO に同行してもらおうと考えていた。国境付近に暮らす人々の集落に入りたいと考えたからだ。お願いした NGO はリサーチやエコツーリズムの企画を請け負う NGO であった。私とスタッフは、ミーティングを重ね、訪問するエリアやインタビュー対象者の選出、質問事項などを決めていった。出発する 2 日前になって予算の話になった。

「800 万ルピアほど用意してくれる？」

800 万ルピアといえば、日本円で 11 万円ほどである。80 万ルピアの間違ひではないかと思ったが、どうもそうではないらしい。結局、この NGO と一緒に国境へ行く計画は白紙となってしまった。彼らはずい最近、日本人のグループの国境付近の取材に同行したと話していた。聞けば、某大手新聞社のジャカルタ支局であった。彼らがいくら払ったのかは知らないが、800 万ルピアぐらい安いものであろう。

結局、国境へは他の NGO のスタッフと行くことになった。だが、その行程は容易ではなかった。旅の相棒は、オフロード用のバイクに乗って午後 3 時頃、私のホテルへやってきた。彼がやってくると同時に、ポンティアナックの街に久しぶりの雨が降り始めた。とりあえず小さな屋台で甘いコーヒーを飲みながら雨が止むのを待っていると、1 時間ほどして雨が小降りになった。思い切って出発することにした。

とりあえず今日の目的地は、ソソックの街。ソソックへ行くには、ジャランパンジャンとジャランペンデックと呼ばれる道がある。その名の通り、ジャランパンジャンは長い道であるが舗装されているのに対し、ジャランペンデックは、距離は短いが舗装されていない。私たちは、オフロードのバイクということもあり、ジャランペンデックを進むことにした。

ポンティアナックを出発して1時間ぐらいたった頃、雨は突然激しくなり、私たちは小さな雑貨屋で雨具を購入し、そのままそこで雨宿りをするようになった。小降りになり、私たちは再び出発することにした。レインコートを着込み、ヘルメットを被り、いざ出発という時にバイクのエンジンが全くかからなくなってしまった。どうやらエンジンの部分に水が入り込んでしまったようであった。相棒は、すっかり行く気を無くし、

「ここを通るトラックに乗せてもらってポンティアナックへ戻ろう」と言い出した。すぐそこに修理屋があるという雑貨屋の主人の一言で、ようやく彼は思い腰を上げた。彼は10分ほどで戻ってきた。エンジン部分を開け、水を出すと、バイクは再び力強い音をたて始めたのだ。相棒もすっかり行く気を取り戻したので、私たちは夕闇の中をもう一度走り出した。小降りになっていた雨は、進むにつれて激しくなった。雷も鳴りはじめた。その時だ。オフロードのバイクは、泥にタイヤが取られ、スローモーションのようにゆ

▼ 道の両側にオイルパームの畑が続く。



っくりと横転した。バイクのランプが消え、辺りは闇に包まれた。何も見えない。全く何も見えない。ひたすら闇が続いているだけである。稲妻が光った。稲妻の光は、どこまでも続く森とその中貫く一本の道を照らし出した。私たちは、森の中を走っていたのである。カリマンタンは本当に森の島なんだと泥だらけになりながら再確認したのであった。

〈つづく〉

HUTAN
 サイトン^{FE}への^{FE}お便りから……

〈会費、カンパを頂いた方々〉 (2006年6月30日~2006年9月14日) (敬称略)
 伊藤万千子 H.I. 太田敏一 大東弘 岡本昭子 春日直樹 春日美恵子 加藤憲司 康由美
 金沢謙太郎 小森宮美枝 坂本有希(環境フォーラム坂本) 住田好江 田中亚子 谷川宏 地球の
 友金沢 辻垣正彦 寺川庄蔵 林昭男 平井英司 藤岡正雄 細川弘明 柳下恵子
 (ありがとうございました)

〈おたよりから〉 (敬称略)
 ☆ラミン不売運動の成功おめでとう。 7/5 (辻垣正彦)
 ☆ニュースレターの「ボルネオ島に行く」毎回楽しみに読んでいました。(中略) 先住民の人々の暮
 らしの 貴重な記録でもあります。紀行文としても魅力がありました。7/21 (柳下恵子)

ちょっと ニュース

「禁輸」の中国産木炭、なぜか出
 回る

2006年08月14日03時00分

「森林保護」を名目に中国で輸出が禁止されている中国産木炭が、その網をかいくぐって国産の木炭を押しつけ、グルメブームやアウトドア志向の高まりで復活しつつある木炭需要を支えている。産地の後継者不足に悩む国産炭は価格競争に勝てず、シェアを奪われる一方だ。

「輸出禁止？すっかり忘れていましたよ」

都内の焼き鳥店の店主は懐かしそうに振り返る。店には「紀州備長炭使用」の木札が下がる。

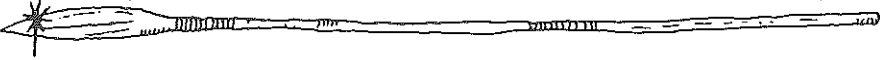


「炭がなくなる」。グルメブームで大量の木炭を消費し、その8割を中国産に頼っていた外食産業に衝撃が走ったのは04年10月。中国政府が天然木の炭の輸出を全面的に禁止した時だった。

だが、それから一年半以上たったいまも焼き鳥店主は国産と中国産の備長炭を併用する。価格も禁輸前と同じ。「なくなるなんて話は、もう聞かない。輸入炭は安く助かる」という。

中国からの輸入は昨年、禁輸前の7割ほどに下がったが、依然、輸入炭の4割近くを占める。林野庁は、こうした中に中国側の禁輸の目を逃れて輸入される炭が多く含まれている、とみる。

HUTAN ACTION SCHEDULE



● 10月8日(日) 9:00-12:00 エル大阪 第4回洗剤追放全国集会

□第3分科会

【分科会窓口】担当：大東弘、稲田みどりさん

【討議結果】表題：『合成洗剤と環境(教育)問題』

環境教育の問題も含めた内容を検討、熱帯雨林、パームオイルの問題など、合成洗剤と水を取り巻く環境問題をテーマとした分科会。

講師：峠隆一さん——(ウータン森と生活を考える会でもおなじみ)、

その他、地域での環境教育について、はらだともよさん(聖和エコクラブ)、

山田みち子さん(芦屋川に魚を増やそう会)

● 10月15日(日) pm 1:30 ~ 4:30

世界熱帯林園圃 — 現地報告会 —

「インドネシアの森林破壊と違法伐採」

～ イランウータンガラミンの森にもどってきた～

【場所】ドーンセンター(大阪府立女性総合センター)

大阪市中央区大手前1-3-49 Tel. 06-6910-8615

(京阪-地下鉄「天満橋」下車 東へ徒歩7分)

→ セミナー室1です。

*11月10日ころ——「現地からの声！インドネシアの森林破壊をどう止めるのか」

ITTO(国際熱帯木材機関)にウータンから招くインドネシアNGOのメンバーを東京、大阪に招き、集会をします。追って、はがきで連絡します。



ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36

サクラビル新館308

・ホームページ

www.005.upp.so-net.ne.jp/ 関西市民連合」気付
hutan/ Tel.06-6372-1561

【一部】300円 【年会費】4000円

【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。